

niponica

Discovering
Japan

にほにか

no. 23



特集

よそおう日本



ケンゾーやヨウジヤマモトなど、世界的に活躍するデザイナーを輩出してきた文化服装学院の2017年ファッションショー（写真提供＝文化服装学院）

niponica
にぽにか
no. 23
contents



日本語で「日本」を表す時の音「にっぽん (nippon)」をもとに名づけられた「にぽにか (niponica)」は、現代日本の社会、文化を広く世界に紹介するカルチャー・マガジンです。日本語版の他に、英語、スペイン語、フランス語、中国語、ロシア語、アラビア語の全7カ国語版で刊行されています。

特集

よそおう日本

- 04 日本の美意識を知る
キーワード
- 08 美意識につつまれた
日本の花嫁
- 10 日本の化粧いまむかし
- 14 最新医療を美容に
- 16 「美しい」を
力に変える人びと

- 22 召し上がれ、日本
花寿司

- 24 街歩きにっぽん
会津若松

- 28 ニッポンみやげ
和櫛

表紙／和の花嫁衣装をまとう、現代の日本女性（写真＝下園啓祐、モデル＝きなり、写真提供＝DE & Co./THE KIMONO SHOP）

no.23 H-300207

発行／日本国外務省
〒100-8919 東京都千代田区霞が関2-2-1
<http://www.mofa.go.jp/>

特集

よそおう日本

ファッション、髪型、メイクといった“よそおい”。
日本独自の文化のなかでさまざまに育まれてきた歴史をひもときながら、
現代の日本人がどのように文化を受け継ぎ、発展させてきたかを紹介する。

日本の美意識を知る キーワード

日本人のよそおいの根底にある独自の美意識。
日本では何を美しいと思い、何を大事にしてきたのか。
脈々と受け継がれてきた、美意識の心と言葉。

優美 yuubi



柔らかで、たおやかな美しさ。控えめでありながら、姿や動作がしなやかで、物事が移り変わる様を楽しむ余裕をもつ。

上村松園「京美人之図」1932～1935年頃（所蔵＝株式会社ヤマタネ）。団扇を手にした着物姿に季節の移ろいを感じる

壮麗 sourei

気高さ、麗しさ。華やかで煌びやかな中に上品な優雅さがある。

色とりどりの刺繍が美しい着物を
まとう日本女性（写真＝下園啓祐、
モデル＝きなり、写真提供＝
DE&Co./THE KIMONO SHOP）





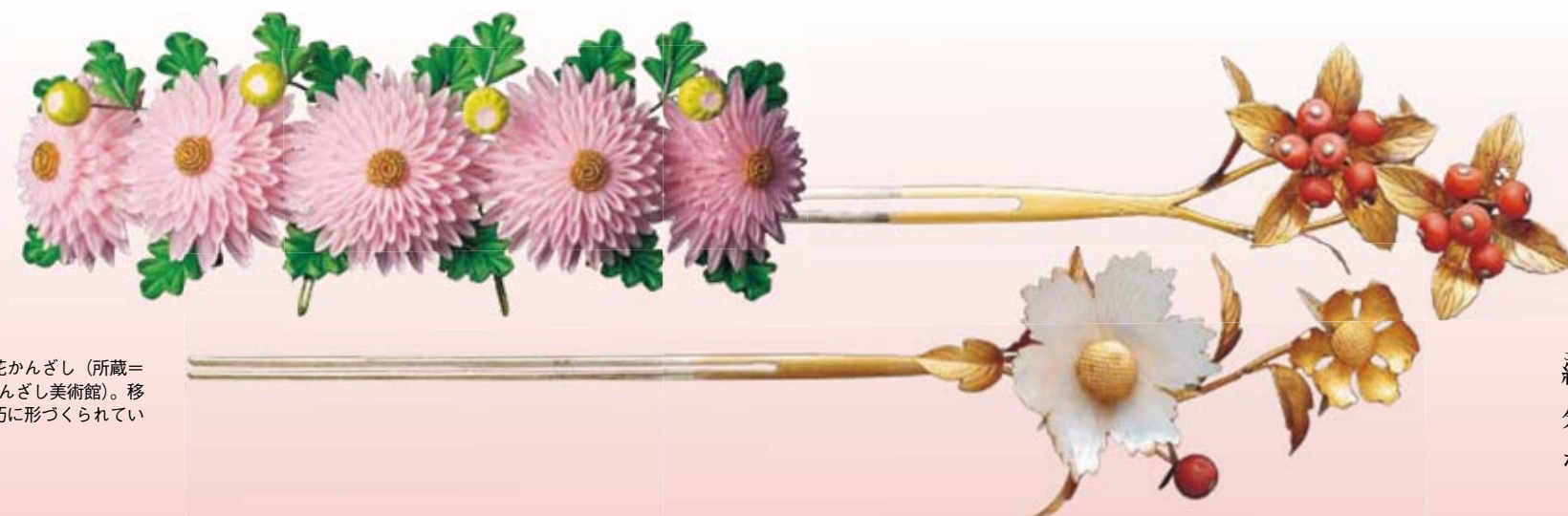
高島華宵（たかばたけかしょう）「移り行く姿」
1935年（図版協力＝弥生美術館）。19世紀後半から20世紀初頭までの女性たちの春夏秋冬の姿を描いた屏風。上は秋冬の様子

雅

miyabi

上品で知的に洗練されたもの。
繊細さと鋭敏さを兼ね備えた感
受性をもち、物事の趣を面白がる。

四季折々の花々を模した花かんざし（所蔵＝上・金竹堂、中・下 櫛かんざし美術館）。移ろいゆく自然の情趣が精巧に形づくられている（写真＝野村正治）



繊細

sensai

細やかで緻密なもの、儼いもの。一見しても
分からない部分にまで丁寧にこだわり、小さなものをひとつひとつ組み立てていく精巧さ。



白い着物

伝統的な衣装に身をつつんだ、結婚式の花婿と花嫁。さまざまな国で婚礼の衣装として白を着るように、日本の花嫁も全身を白で統一する。清純潔白を意味する色である白には、婚家の色に染まるという意味も込められた。

美意識につつまれた 日本の花嫁

日本人がつちかってきた、よそおいの美意識は、現代も婚礼の花嫁の姿に受け継がれている。

写真提供●アマナイメージズ、ピクスタ

紋様

花嫁の着る白い着物には、これからの幸せな結婚生活を祈って、縁起の良い紋様が織り出されている。柔らかな絹地の表面に浮かび上がる紋様は、日本ならではの控えめな美しさを感じさせる。



華やかな柄

結婚の誓いが終わった後、花嫁は色鮮やかな着物に着替え、親族や友人を交えた披露宴に出る。頭にかぶった白い帽子も外し、その顔を客人に披露する。



髪飾り

伝統的な花嫁の髪型は、立体的に結われた日本髪が基本。髪飾りには、きらびやかで、細やかな手仕事がほどこされたかんざしが使われる。

日本の化粧 いまむかし

白粉に口紅、頬紅、お歯黒……、
日本人の化粧はどのように形成され、変遷してきたのか。
世相の影響を受けつつ、
独自の美意識を反映させてきた歴史をたどる。

談話 ● 村田孝子



1 紅筆で口紅をひく女性を描いた19世紀前半の浮世絵
2 1185年より鎌倉幕府を開いた源頼朝の妻・北条政子の豪華な化粧箱



2 日本人の化粧のはじまりはいつだったのでしょうか。3世紀後半の古墳時代のお墓から、赤い顔料を顔や身体にほどこした人物埴輪が発見されています。ただし、この赤は悪いものから身を守るためのものと推測され、現代の化粧とは異なるものでした。現代のような「おしゃれ」としての化粧が確認できるのは6世紀後半のことで、宮廷の女性が紅や白粉、香といった化粧品を使っていたことが文献に記録されています。
9世紀末、平安時代になると、高貴な女性は何枚も美



3

9世紀 ～ 12世紀

3 十二単を着て、顔を白く塗る女性が描かれた絵巻物

13世紀 ～ 14世紀

4 戦いの場でも化粧をする男性貴族の姿



4

しい衣を重ねた十二単と呼ばれる着物を着て、髪を長く伸ばすようになります。こうしたボリュームあるよそおいに映えるよう、顔に白粉をたっぷり塗って白さを強調、眉は生来の眉を抜いて額の上部に描き、唇は小さく見えるように描いていました。歯を黒く染める「お歯黒」も、この当時から既婚女性を表す習慣になったと考えられています。

12世紀はそれまでの貴族から武士の時代に変わります。女性は活動的になり、白粉は薄くなり、長い髪を後ろに

束ね、動きやすい服装をするようになります。一方、貴族の男性の間では、おしゃれとしての化粧が定着していきます。1603年から始まる江戸時代には、商工業が飛躍的に発達し、文化の担い手も、武士から町人へと変わっていきます。化粧が日常の習慣として庶民にも親しまれる時代となりました。

1868年、明治時代の幕開けとともに、西洋文明が急速に取り入れ近代化を目指した「文明開化」が行われ、化粧も大きく変わるようになります。伝統的な眉剃りやお



5

19世紀後半

5 文明開化により、上流階級の社交場ではドレス姿で踊った

20世紀前半

6 美人画で名高い画家・竹久夢二が描いた化粧をしている女性



6

歯黒は廃止され、自分の顔に似合った眉化粧や自然な白い歯が美しいとされるようになったのです。

20世紀前半から後半にかけては、経済の発達とともに、働く女性が増加していきます。彼女たちは動きやすいよう、洋装にショートカットをしていました。のちに「モダンガール」(モガ)と呼ばれるようになり、時代をリードしていきます。「棒口紅」と呼ばれるリップスティックが作られるようになるなど、手軽にできる化粧品も人気を呼びます。

そして、戦後から現代。1980年代後半から1990年代初めの好況期には、ヴィヴィッドな青みピンクの口紅が、2011年の東日本大震災後には、癒しを与えるようなふんわりとした色使いや雰囲気をつくる「ゆるふわメイク」が流行るなど、時代の様相に合わせて、ファッションやメイクも変わります。一方で、個性の時代となり、「自分らしく」よそおふことが重視されるようになっています。



7



8

8 ファッションデザインの先鞭をつけた画家・中原淳一が1955年に描いたオフィス服の女性たち

村田孝子(むらた・たかこ)
1950年東京都生まれ。青山学院大学文学部教育学部卒。ポーラ文化研究所シニア研究員。主に日本と西洋の化粧史・結髪史を調査している。主な著書に『浮世絵にみる江戸美人のよそおい』(ポーラ文化研究所)、『江戸三〇〇年の女性美 化粧と髪型』(青幻舎)がある。

1945年以降

7 女性の社会進出にともないロングスカートが流行した

現代

日本の中でもファッションやメイクの嗜好は一つではなく、細分化し、多様化している



9

9 華やかなメイクは1980年代後半の経済バブル期を象徴
10「世界で最も美しい顔100人」に選ばれた女優・石原さとみ
11 よそおいがユニークで世界でも話題のコメディエンス・渡辺直美



10



11

1 鳥居清峯「口紅さす美人(東錦美人合)」(画像提供=公益財団法人アダチ伝統木版画技術保存財団) / 2 国宝「梅時絵手箱」(所蔵=三嶋大社) / 3 国宝「源氏物語絵巻 東屋一」(所蔵=徳川美術館、© 徳川美術館イメージアーカイブ / DNPartcom) / 4 「護良親王出陣図」(所蔵=個人) / 5 楊洲周延「貴顕舞踏の略図」(所蔵=神戸市立博物館、Photo: Kobe City Museum / DNPartcom) / 6 竹久夢二「霜葉散る」(所蔵=竹久夢二美術館) / 7 「服飾 ロングスカートが流行」1952年(写真提供=朝日新聞社 / 時事通信フォト) / 8 中原淳一「中原淳一ブラウス集」(所蔵=株式会社ひまわりや、© JUNICHI NAKAHARA / HIMAWARIYA INC.) / 9 「当時流行のビッグシルエットのスーツで街を歩く女性」1989年(写真提供=共同通信社 / アマナイメージズ) / 10 石原さとみ(写真提供= © HoriPro Inc.) / 11 渡辺直美(写真提供= © YOSHIMOTO KOGYO CO., LTD.)

1 生薬成分で肌を若返らせる

生薬の甘草から微量に抽出される成分「イソリクイリチゲニン (ILG)」は、今、医療の現場で注目されている成分だ。香川大学の研究で、細胞の劣化を引き起こす酸化や炎症などを抑える作用が明らかになり、商品化が期待されていた。2011年、世界で初めて化粧品として製品化され、肌のしみやしわ、敏感肌や肌荒れの改善が認められている。

さまざまな効能をもつ成分「ILG」を配合した美容液（保湿液などで肌を整えた後、仕上げに塗るもの）。ルディア「ILG-b コンセントレートセラム」



〈使用方法〉
洗顔後に保湿液などで肌を整えた後、5mlほどを気になる部分を中心に顔になじませる。
〈効果〉
乾燥、たるみ、しみ、しわなど、年齢による肌のトラブルを改善する。
〈特徴〉
生薬として使われてきた甘草のなか中のイソリクイリチゲニン(ILG)成分を抽出・化粧品に配合したのは世界初。

最新医療を美容に

年齢とともに生じるしわやしみ、たるみ、紫外線によるダメージで起こる炎症など、さまざまな肌のトラブルを解消するため、日本の美容品には最新の医療技術が使われている。

写真提供●アマナイイメージズ
協力●株式会社ルディア、株式会社MTG、コスメディ製薬株式会社

2 肌の細胞を活性化

細胞の回復に大きく作用し、痛みを抑え、疲労を回復させるなど、医療の現場でも利用されている微弱電流MCR（マイクロカレント）。ローラーの深くつまみ流す動きで、引き締まった肌へ導く美顔器に、ソーラーパネルを搭載するオリジナル技術でMCRを発生させる。



イメージ図



〈使用方法〉
顔や首、ウエストなど、気になる部位のラインに沿って、肌の柔らかい部分をつまみ上げるようにローリング（先端の球を転がす）。
〈効果〉
ハンドルのソーラーパネルから光を取り込み、マイクロカレント（微弱電流）を発生させる。
〈特徴〉
医療現場でも取り入れられている微弱電流の機能が手軽に使用できる。



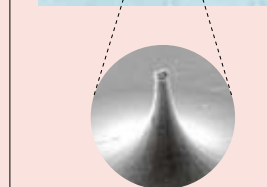
マイクロカレント技術を家庭でも体験できるMTG「リファ」

3 ミクロの針で成分を肌内部まで浸透

シートを肌に貼ることで、薬を全身に浸透させるマイクロニードル技術。注射や点滴に匹敵する効果をもたらすとして、感染症対策のワクチンや糖尿病患者のインスリン投与などへの応用が期待されている。コスメディ製薬株式会社では、世界で初めてヒアルロン酸でマイクロニードルをつくることに成功。貼るだけで保湿成分であるヒアルロン酸を肌内部に浸透させ、しわやしみを予防することができる。これまでにない美容シートとして話題を集めている。



〈使用方法〉
目の下などにシートを貼付する。
〈効果〉
ヒアルロン酸が角質層で溶解、その部分の保水力がアップし、ハリや弾力がもたらされる。
〈特徴〉
肌本来の物質であるヒアルロン酸を針状に結晶化したマイクロニードル技術は世界初。



シートの内側には微細なヒアルロン酸の針が密集し、貼りつけると肌の水分で溶けて浸透する

マイクロニードル技術で作られた、コスメディ製薬「ダーマフィラー」



「美しい」を 力に変える人びと

化粧をすることは、容姿を美しくするだけではない。
介護やスポーツの現場で活かされる
化粧のさらなる効果に迫る。

写真●小原孝博
写真提供●アフロ
協力●株式会社コーセー、株式会社資生堂

全力の演技を応援!!

シンクロナイズドスイミングの日本代表チーム「マーメイドジャパン」を陰から支えるのが、コーセーのメイクアップアーティスト・石井勲さんだ。

「スポーツをするときも美しく」というコンセプトで、汗をかいても化粧崩れしにくい撥水技術を開発してきたコーセーは、オリジナルの樹脂成分を配合した、密着性やキープ力に優れた化粧品に定評がある。そのコーセーがマーメイドジャパンのオフィシャル コスメティックパートナーとなったのは、2006年4月。以来、10年以上にわたり、メイクアップの開発や指導に携わってきた。

長年トップアーティストとしてメイクをしてきた石井さんは、演目が新しくなると、代表チームの監督などと相談しながら、新たな水着や曲・テーマに合わせたメイクを作り上げる。ポイントは、遠く離れた応援席や審査員席から美しく見えるメイクにすること。「水着で最も鮮やかな色を必ずメイクに取り入れるようにしています。そうすることで、遠くから見ても全体の調和がとれ、演技の見栄えも際立つように思います」と石井さんは言う。

また、ハイライトを活用して立体的なメイクを心がける。チーム全員に一列に並んでもらい、正面・横・斜めなどさまざまな角度から全員の統一感をチェックし、各



選手への細やかなメイク指導も忘れない。

驚いたことに、水中であれだけ激しく泳いでも崩れないのに、特殊な化粧品ではなく、市販品を使っているのだそうだ。もちろん、水中競技でも崩れないメイクには、石井さんならではの秘密がある。

「たとえば、アイメイクではウォータープルーフのリキッドアイカラーの上にパウダータイプのアイカラーを重ねて発色を高め、さらにリキッドアイカラーを重ねることで密着し、崩れにくくしています」

市販されていない色は、別々の色を重ね塗りすることで作り出すこともあるという。美しいメイクによる統一感や一流アーティストからの直接の指導が、選手たちの自信や集中力にもつながっている。マーメイドジャパンの力強さや優美さは、日本の化粧技術が支えているのだ。



上・左／演目が変わるごとにメイクアップ講習会を開催し、各選手に細かな指導をしていく

「メイクを作り上げるのは共同作業。代表チームのスタッフや選手とのコミュニケーションも大切にしています」と石井勲さん



介護現場に化粧療法を

年齢を重ねても、化粧の習慣をもち続けることで心身ともに健康になる。そんなデータが今、高齢化社会を迎えた日本で注目を浴びている。

化粧が認知能力や筋力維持向上にもつながるという研究を進めているのが、資生堂の池山和幸さんだ。

「研究の結果、お化粧をする時に使う手指や腕の筋力は、食事の動作の2～3倍だということが分かりました。また、婦人方が楽しみながらできるお化粧やケアが、知らず知らずのうちにリハビリ効果をもたらすと伝えと、それまで化粧は二の次だと考えがちだった医療関係者たちも関心をもってくれるようになりました」

資生堂が長年開催してきた美容教室の実績をもとに、池山さんは自らがもつ介護福祉士の経験も加えながら、「化粧療法」を開発してきた。このプログラムを導入した

介護の現場からは、「認知症の進んだ方でも、表情が明るくなり、自立度が増した」などの、嬉しい報告が相次いでいるという。

現在は、単にお化粧を楽しんでもらうだけでなく、介護予防や、健康寿命（健康上の問題がなく日常生活を送ることができる期間）を延ばすために化粧療法を取り入れる地方自治体も増えている。

「肌のケアやよそおうことは、心身ともに健康になります。『よそおう心をもち続けよう』が、健康長寿を目指す人びとの合言葉になるように、もっと世の中にこのことを知らせたい」

それが池山さんの目標だそうだ。



上・左／介護施設や病院での美容教室風景。自身でお化粧することで、容姿を美しくするだけでなく、心身機能や生活機能の向上につながる



「お化粧を楽しむことで、高齢期に人生最高の輝きを」と池山和幸さん



男たちも美しく

写真●伊藤千晴 写真提供●アフロ

日本の男性の美容に関する意識はかなり多様になったとはいえ、その根幹では清潔感が重要視されている。

男性向け化粧品は、髭剃りや整髪といった従来の身だしなみ以外に、近年は用途や種類が増え、肌の汚れを落とす洗顔料、肌荒れを防いだり脂ぎって見えないためのスキンケア用品や、ニキビ痕やしみをカバーするコンシーラー、スポーツ時の屋外での紫外線を防ぐ日焼け止め、体臭を防ぐ制汗剤や制汗シートなども広く愛用されている。

一方では男性向けのエステティックやマニキュアを行うサロンもできて、髭や体毛の脱毛や、マニキュアで爪を美しく整えたいという需要にも応えている。

日本では欧米に比べると香水やオーデコロンを使用する人の割合は少ない。あくまでも清潔、消臭ということが日本の男性の身だしなみの基本となっていて、日本文化の特徴である。



1 クールタイプの制汗シート／2 クールタイプの洗顔料／3 ヒアルロン酸を配合した保湿液／4 しみ・そばかすを防ぐベントタイプの美容液／5 角栓を除去する鼻専用パック／6 直塗りタイプの制汗スティック。男性を意識した商品は、手軽に持ち運びのできるものが好まれる

日本のご当地コスメで美しく!

花や果物などの天然素材を原料にし、伝統工芸の製造技術を応用した化粧品が、日本各地にある。

その土地ならではのアイテムで、新たな美と癒しに出会おう。

写真●伊藤千晴

愛媛 Ehime

バスソルト

ぽんかんの香り

さまざまな柑橘類の名産地である愛媛産の柑橘の果皮から抽出した精油を使用した入浴剤。芳醇な香りと保湿効果が期待される
<http://yaetoco.jp>



大分 Oita

クレイパック

温泉ファンゴ

別府温泉特有の粘土から生まれたパック。温泉成分やミネラルを豊富に含み、肌の余分な脂質を取り除くとともに、温泉成分できめ細かな肌へと導く
<http://only-sge.co.jp>



(写真提供=オンリー株式会社)

奈良 Nara

QUON

ボディパウダー

無農薬・自然農の奈良県で採れた茶を使用し、厳しい基準で製造。ボディパウダーには米と葛の粉が使用され、さらっとした心地よい肌へ導く
<http://www.quon-cosme.jp>



富山 Toyama

マリンミネラル 濃縮ミスト

富山湾の海洋深層水を用いたフェイシャル用の保湿ミスト。日本有数の降雪地帯の雪どけ水に含まれる、豊富なミネラル分が肌に潤いを与える
<http://www.goshu.co.jp/tqw/>



新潟 Niigata

爪ヤスリシャイニー

金物の産地として知られ、ステンレスの磨き技術に定評のある燕市産の爪ヤスリ。カーブのある面に細かい溝が斜めに交差し、女性ばかりでなく男性にも愛用者が多い
<http://www.yasuri.net>



岩手 Iwate

気仙椿 ハンドクリーム

気仙地域の人びとが集めた椿の種から抽出した椿油を配合したハンドクリーム。東日本大震災で被災した地域を支援するプロジェクトとして開発された
<https://hollywood-jp.com/product/kesentsubaki>



北海道 Hokkaido

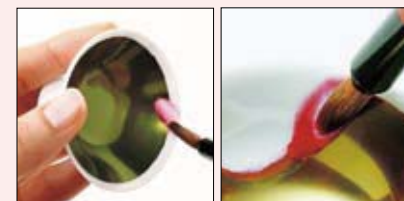
アスパラガス マルチバーム

遠軽町で生産されるアスパラガスのエキスを保湿成分に配合した全身用固形クリーム。顔や唇など乾燥しやすい部分に特に効果がある
<http://www.e-mystar.jp>

東京 Tokyo

小町紅

東京の日本橋で1825年に創業した老舗が、当時から変わらぬ製法で仕上げている日本伝統の口紅。紅花の花弁に含まれる天然の赤色素のみを原料としている
<http://www.isehanhonten.co.jp>



(写真提供=株式会社伊勢半本店)

京都 Kyoto

胡粉ネイル

貝殻を原料とする日本古来の絵具「胡粉」を用いたネイルポリッシュ。京都の日本最古の絵具店が開発。刺激臭がなく爪に優しい
<https://www.gofun-nail.com>



(写真提供=上羽絵惣株式会社)

群馬 Gunma

kinu soap

絹の原料である繭に含まれる成分の抽出液を配合した、保湿と抗酸化効果のある石けん。富岡産の繭を使い、地元の大学医学部皮膚科などと共同開発した
<http://kinu-kiryu.com/>



三重 Mie

おいせさん お浄め塩スプレー

ミネラルたっぷりの天日塩と天然エッセンシャルオイル配合のフレグランススプレーで心身の浄化を促す。日本を代表する神社のひとつ、伊勢神宮の参道で購入することができる
<http://www.oisesan.co.jp>



花寿司

心も華やかになる伝統寿司

写真●伊藤千晴 協力●花味結



花寿司を作って半世紀、宮内マサ子さん

「花寿司」は、具材で花や文様を描く巻き寿司である。千葉県房総半島では祭りや節句などの特別な日には、地元の食材を使い、花寿司を作ってきた。かつては花や文様の花寿司を作ることが多かったが、今は動物やキャラクターなどの絵柄も作られ、子どもから大人まで親しまれている。

海苔で酢飯と具材を、細く切った竹を糸でつないだ巻き簾で巻いた「巻き寿司」が作られるようになったのは、江戸時代後期（18～19世紀）といわれる。一般的に房総半島がある関東地方では細い巻き寿司、関西地方では太い巻き寿司にする。そのため、花寿司は、鰯漁で和歌山県から房総半島にやって来た漁民が伝え

たのではないかとされている。

花寿司の具材は、一般的な巻き寿司と変わらない。ユウガオを乾燥させて細く切ったかんぴょう、ほぐした魚肉を食紅で桜色に染めたでんぶ、そして干し椎茸や野菜などを用いる。また酢飯を巻くために海苔や薄く焼いた卵焼き、野菜の漬物なども使う。

作り方はいたってシンプルだ。まず巻き簾の上に海苔や卵焼きを敷き、酢飯でところどころ、山を作る。その山と山の間に具などをのせて、くるっと巻いて切ると、見事な絵ができるのだ。

房総半島は海に近く、昔から海苔などが身近な食べ物であった。そして千葉県は全国でも卵の生産が盛んな地域である。花寿司を作る宮内

マサ子さんは「卵をたくさん使った、厚い卵焼きで巻きます」という。花寿司は、土地の恵みをより楽しく味わうための工夫から生まれた、味わい料理なのだ。

千葉県鴨川市にある「花味結」(<http://www.hanamiyui.com/>)では、実際に花寿司を作る体験をすることができる。30種類以上の巻き寿司のラインナップから好きな種類を選び、1時間程度で巻き寿司の作り方を学ぶことのできる本格的なワークショップである。花寿司は、アイデア次第でさまざまな絵柄が出来上がるので、皆で一緒に作ったり、持ち寄って食べるとさらに楽しい。

作り方

- 1 巻き簾の上に寿司飯を広げる。両脇に酢飯の山を作る
- 2 山のように盛り上がった部分に切った海苔をかぶせる。谷間の部分にはピンク色のでんぶを入れる。両脇に茹でた青菜を並べる
- 3 巻き簾でしっかり巻いてから切る



左／寿司飯で山を作り、海苔を敷き、紅ショウガやでんぶをのせていく
これを綺麗に巻くことができると右写真中央のお花の模様になる

次頁／海苔や厚焼き卵をくるくる巻いて切ると、華やかな花寿司が完成する





猪苗代湖の西側にある崎川浜。夏になると水遊びやキャンプをすることができる



会津若松

福島県の中央部に位置する会津若松。武士の町として栄えた国内屈指の観光地だ。四季折々の自然や工芸の色彩を探しに旅に出よう。

写真提供●伊藤千晴、アマナイメージズ

会津若松のシンボルである鶴ヶ城。この城は、14世紀後半（1384年）に建てられ、江戸時代（17～19世紀）には会津藩の藩主の居城となった。1874年に廃城となったが1965年に再建され、その美しい姿が蘇った。城の最上階には会津若松市内を見渡せる展望層があり、春は満開の桜、夏は新緑、秋は紅葉、冬は一面の雪景色など、一年を通して彩り豊かな表情を楽しむことができる。



上／会津藩主の居城、鶴ヶ城。春には桜が満開となる
左／武士の町として栄えたこの地には江戸時代の風情を残す建築がところどころに今も残る中／漆の艶やかさが美しい会津漆器。約400年の歴史をもつ
右／冬には雪を見ながら温泉に入る雪見風呂も楽しめる東山温泉（写真提供＝向瀧）



会津若松市の西若松駅と南会津町の南
会津高原尾瀬口駅を結ぶ会津鉄道



左上／里芋やニンジンなど具がたくさん入った「こづゆ」。祝い事の際に食べることが多い
右上／杉や檜の木を曲げてわっぱを作り、中にご飯などを入れて蒸し上げる「わっぱ飯」
左下／特産品の雪下キャベツは、果物のような甘さが特徴
右下／会津小菊南瓜や会津丸茄子などの会津若松の伝統野菜（写真提供＝ふくしま新発売）

北東の方角にそびえる磐梯山は「日本百名山」に選ばれている名山だ。標高1819メートル。夏は登山、冬はスキーといったアクティビティが楽しめ、また、レンゲツツジやパンダイクワガタなど高山植物や珍しい昆虫の宝庫でもある。

磐梯山の南麓にあるのは猪苗代湖。周囲約49km、湖としては日本で第4位の大きさを誇る。湖水浴、フィッシング、クルーズなども盛んだ。西岸の崎川浜は湖の向こうに磐梯山が見える人気のスポット。夏は湖水浴客で賑わい、冬にはシベリアからやって来る、たくさんの白鳥

の姿を見ることができる。
美しい日の出と夕日で知られるのは、会津若松市内と猪苗代湖の間にある、背あぶり山である。山頂からは、朝日を浴びて輝く猪苗代湖、そして山の向こうに沈む美しい夕日を見ることができる。

市内から車で約10分の場所にある東山温泉は、温泉地として開かれたのが8世紀という長い歴史をもち、多くの著名人や文人に愛されてきた。現在は湯川沿いには20数軒の温泉旅館やホテルが立ち並び、温泉街の情緒を味わうことができる。

会津若松には昔から親しまれてきた料理もあり、野菜などがたくさん入った汁のこづゆやわっぱ飯は地元の野菜や出汁をふんだんにとって作ることから、絶品の味だ。また近年、江戸時代に盛んに作られていた伝統野菜の復活をかけて地元の農家による取り組みも行われている。
美しい山々、温泉などの自然の豊かさと武士の文化から生まれた料理や工芸品の数々。会津若松を訪れると色とりどりの表情に出逢うことができ、それは訪れる者の目を存分に楽しませてくれるのだ。



毎年9月に開催される会津秋まつり。武士姿などに扮した人びとが練り歩く（写真提供＝会津若松市役所）



左／転がすと起きることからその名が付いた郷土玩具の起き上がり小法師
下／首がゆらゆらと揺れる玩具、赤べこ。「べこ」とはこの地方の方言で、牛のこと
右／へたれにくく、縞模様が特徴の会津木綿



会津若松エリア地図

●交通案内

電車の場合は、東京駅からJR東北新幹線に乗りし、郡山駅経由でJR磐越西線に乗り替え、会津若松駅まで約2時間半。もしくは浅草駅から東武鉄道・野岩鉄道に乗りし、会津高原尾瀬口駅を経由し、会津鉄道で会津若松駅まで約4時間半。

●問い合わせ

会津若松観光ビューロー

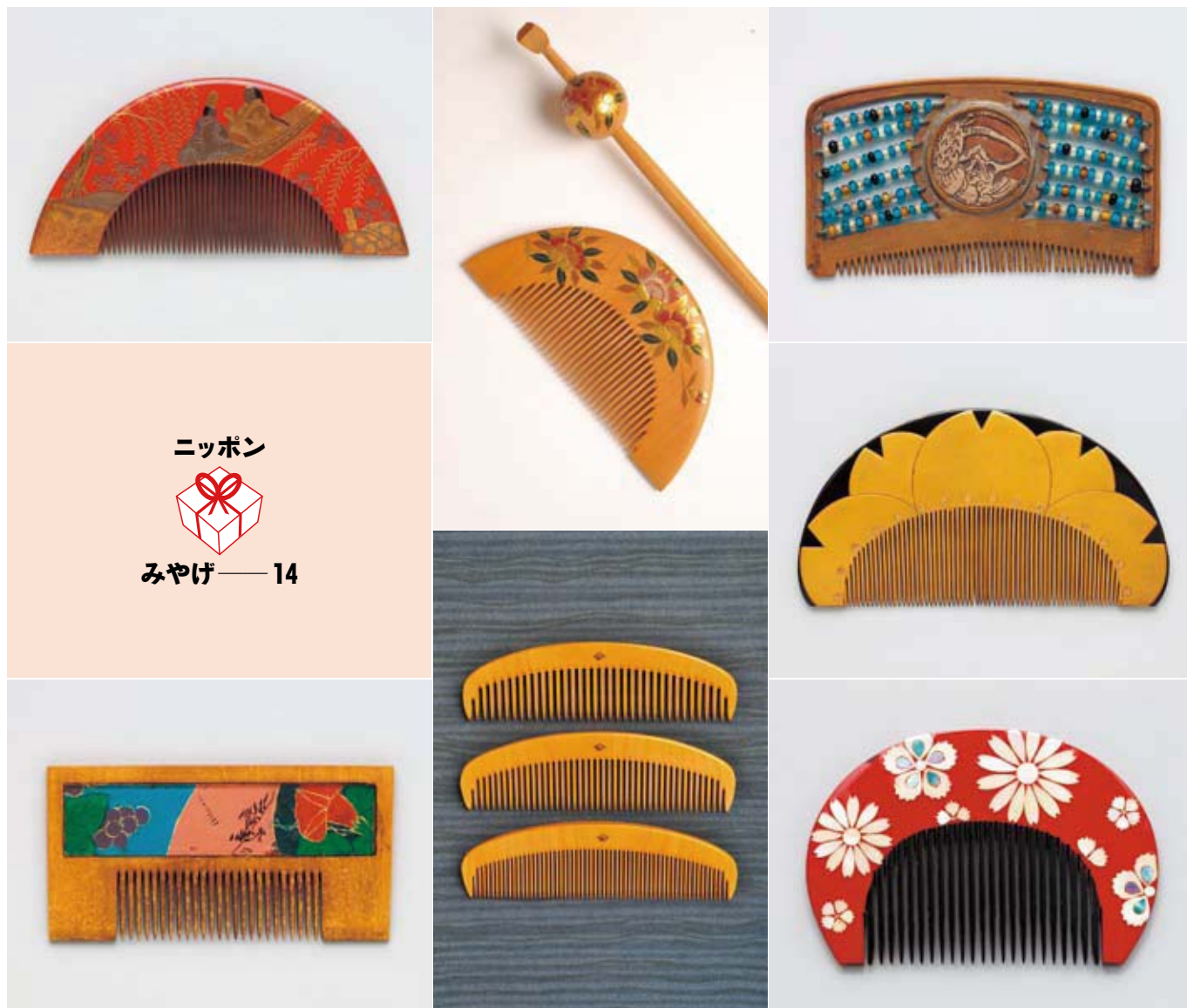
<http://www.tsurugajo.com/>

東山温泉観光協会

<http://www.aizu-higashiyama.com/>

会津鉄道

<http://aizutetsudo.jp>



ニッポン



みやげ — 14

髪に美しさを添える装飾品

和櫛

写真●伊藤千晴 写真提供●櫛かんざし美術館

日本における櫛の歴史は古く、佐賀県の遺跡では約7000年前の木製の櫛が発掘され、その縦に長い形から、髪にさす装飾品だったと考えられている。8～12世紀（平安時代）、日本女性の髪は長く垂らした垂髪であった。櫛は髪をとくための実用品として、また、前髪を上げるためにさすなど、実用と装飾を兼ねて使われた。

17世紀（江戸時代）になると女性の髪型は、髪をまとめやすいよう、固練りの油（びんづけ油）を使って複雑な形に結い上げる「日本髪」となる。日本髪は結うのに手間がかかるため、当時はあまり洗髪しなかった。よって櫛も装飾品としてだけでなく、

髪を汚れると、ほつれを直すなどの道具として利用された。

櫛の材料は、弾力があり、強い力でいても歯が折れない黄楊が最良という。伝統的な櫛は丁寧に、やすりで磨き上げ、髪の長さによって歯の間隔を変えといった細やかな工夫がされている。最後に椿油で滑らかさを与え、光沢のある色合いに仕上げる。

19世紀（明治時代）以後、女性の髪型が多様化するに従い、櫛はより実用品へと変化していった。今では、携帯しやすい男性用の櫛、分け目をつけるために細長い柄のついた櫛など、用途によって形のバリエーションも豊富だ。

niponica

にほにか

〈日本語版〉

no.23

発行／日本国外務省

〒100-8919 東京都千代田区霞が関2-2-1

<http://www.mofa.go.jp/>（外務省ホームページ） <http://web-japan.org/>（日本紹介ウェブサイト）